

国際協力特別賞

はじめの一步

立命館守山中学校 1年 淨慶 咲

「外国について知りたい。」そう思い立った私は、チリの日本人学校に勤めるM先生に取材を申し込んだ。M先生は私が小学生だったときの担任の先生で、一年程前からサンティアゴで暮らしている。

M先生は私の急なお願いに快く応じてくれた。チリのサンティアゴでは日本の今と昔が融合したような暮らしをしているようだ。支払いはクレジットカードの利用が主流でありICTの活用も進んでいる。食事はデリバリーが盛んで、レストランではメニュー表ではなくQRコードを読み取り各自で見つめて注文する。無償でもらえる教科書は各自ダウンロードもできる。しかし貧富の差が激しく信号待ちの車の窓を拭いてチップをもらい路上で暮らす人達もいる。先住民の暮らす地区では、堅穴式住居「ルカ」を倉庫代わりに未だ使用している。その他にも子供達の遊びや将来の夢、日本とは違うおおらかな国民性や皆がチリの文化を大切にしていることなどを、詳しく教えてもらった。話を聞いてチリの伝統料理に興味を持ったので、私は冷凍で取り寄せ実際に食べてみたりもした。

私の中学校の教科書には、南米の高地での暮らしとしてアルパカを飼育し民族衣装を着る人々が紹介されている。テレビでは南米のお祭りや壮大な自然の紹介ばかりが目につく。私の中での南米のイメージと実際の生活が全く違うことにとっても驚いた。外国人がテレビのインタビューで「サムライがいない。日本人は着物を着て和風の生活をしているのだ」とよくコメントしているのを見て笑っていたが、まさに私も同じだった。

M先生への取材を行い、これだけ情報が多い現代でも私のように現実とかけ離れた思い込みをすることがあると知った。誤った情報をそのまま信じてしまったことによるトラブルも様々なところで起きている。ただ流れてくる情報を受け取るだけではなく、知りたいことや理解したいことを自分から積極的に収集しそれが正しいのかどうかをきちんと確認することがとても大切なことだと理解した。

世界で今起きている戦争では、それぞれの国の歴史や事情、考え方を理解した上で皆で協力して解決方法を探さなくてはならない。環境問題に関しても、国ごとの習慣や考え方の違いによって何が問題で何をすべきなのかはそれぞれ違う。SNSの普及により私達は最新の情報がなによりも大切だと思いがちになってしまう。しかし画面ごしの情報のやり取りや数字だけでは理解し合えない「リアル」があることを忘れてはいけない。「世界と繋がる」とは、インターネットで画面ごしに情報を交換することだけではない。それぞれの生活習慣や文化、歴史があることをお互いに積極的に理解し合い、そして実際に相手の目を見て声を聞き笑顔を交わすことも、やはりとても重要だと感じる。「リアル」に興味を持ちそれを正しく知ろうとすることこそが、世界と繋がるはじめての一步になると私は考える。